

デイサービスというチチャーと島の記憶 —現代社会に護られる伝統綱引き行事—

瀬戸 邦弘ⁱ

沖縄県島尻郡渡名喜村では、毎年カシキー行事にあわせて伝統的綱引き行事が行われる。そもそも沖縄県内では年中行事の一つとして多くの場所で綱引きが行われており、カシキーに際しても収穫や先祖への感謝の意味合いを込めて綱引きが実施されている。本論においては本行事を通して確認・再生産される字・村・島の集合的記憶の醸成過程を、綱引きというコンペティションだけでなく、それに付随して生起する「歌の世界」に注目し検討する。つまり、本論では綱引きを多層な文化複合体として捉え、この行事が、島(村)の記憶の確認の場であり、また醸成装置として機能してきた様に関して考察するものである。特に、その醸成機能が、近年過疎化が進み高齢化が顕著である本村で失われつつあった状況に際し、「デイサービス」という福祉空間が現れる事により引き継がれ、この現代的空間が伝統文化の保護装置(空間)として機能している点に注目し、伝統的文化的動態に関して考察を試みている。

キーワード：離島、福祉事業、デイサービス、伝統文化、集合的記憶

はじめに

沖縄県島尻郡渡名喜村では、毎年カシキー行事にあわせて伝統的な綱引き行事が行われる。そもそも沖縄県内では年中行事の一つとして多くの場所で綱引きが行われており、カシキーに際しても収穫や先祖への感謝の意味合いを込めて綱引きが実施されている。本論においては離島における綱引き行事に焦点を当て、行事を通して確認・再生産される字・村・島の集合的記憶の醸成過程を、綱引きというコンペティションだけでなく、それに付随して生起する意味の世界を特に「歌の世界」に注目し検討する。そのために、本論では綱引きを単なるスポーツコン

ペティションとは見做さずに多層な文化複合体として捉え、この行事が島(村)の記憶の確認空間であり、またそのアイデンティティの醸成装置として機能してきた様を考察するものである。特に、本論ではその醸成機能が、近年過疎化が進み高齢化が顕著である本村で失われつつあった状況に際して、福祉事業である「デイサービス」により引き継がれ、この現代空間が島の記憶の保護装置として機能し始めた点に大いに注目し、現代における伝統文化保護の一事例として考察を試みるものである。

1. 調査地 渡名喜島(村)の概要

沖縄県島尻郡渡名喜村は沖縄本島那覇の西北54.5kmの海上に位置し、渡名喜島・入砂島の2島を合わせて形成され北に粟国島、南に慶良間諸島、西に久米島を臨む立地となっている(沖縄県渡名喜

ⁱ 鳥取大学教育支援・国際交流推進機構教育センター准教授

村教育委員会 1999: 5)。渡名喜島に関する最も古い記録は1623年に編集された歌集『おもろさうし』である。そこでは「ターマタ (二股)」と呼称されているが、これは渡名喜島が南北2つの島に分かれて見える事に由来すると言われる。17世紀中期以降には「戸無島」と記されるようになり、その後、現在の呼称である「渡名喜」へと変化していく。ところで、琉球史における渡名喜島の役割は中国大陸との貿易航路の交易中継地点としての役割であり、西に臨む久米島と並び重要な機能を果たしてきた(渡名喜村役場 1983a: 92-106; 瀬戸, 国宝 2010: 28-39)。

貿易航路の中継地である事からもわかるように、渡名喜島は豊かな海に囲まれており、生業においてもその恩恵を受けてきた。本島では漁業が常に生活の中心にあり、特に近代化を経て昭和30年代頃までは大型カツオ船によるカツオ漁で栄えた経験を有する(渡名喜村役場 1983b: 710-745)。「トナキ節」とも呼ばれる鰹節はその品質の良さから県内では一つのブランドになっていた。また、島内に目を移せば農業も盛んに行われ、特にモチキビは現在でも県内有数の産地である。あわせて、明治末期～昭和50年代までは養豚業も活気を呈していた。これらの恩恵により、島は往時1500人を越すほどの人口で賑わいをみせ活気に満ちていた¹⁾。しかし、それら生業は時代の流れの中で衰退し、大型船のカツオ漁や養豚業などはすでに姿を消している。第一次産業の衰退は島での生活を徐々に困難なものとし、結果として、多くの村民は島の外に生活の場を求めるようになっていった。現在、渡名喜村の人口は377名となり往時の1/4程度まで減少し、沖縄県内で最も人口が少ない村となった²⁾。また、人口の減少のみならず若者世代人口も減少、高齢化が顕著であり、現在では沖縄県内で高齢化率が最も高い村となっている³⁾。

渡名喜村の集落は、島の南北に広がる丘陵地帯の間に位置している。集落内を結ぶ道々には白砂が敷き詰められており赤瓦屋根の古民家、そして伝統的に防風林として利用されるフク木などが集落域全体に確認でき美しい集落景観を呈している(坂本



写真1 渡名喜集落(西字・南字)遠景

1989: 222-224; 武者, 永瀬 1991: 57-80)。村域内は古くから東、西、そして南という三つの“字”に分かれ構成されており、村で行われるあらゆる行事はこの“字”区分にしたがい取り行われることになっている。ところで、この“字”区分は現在の行政による公的境界線ではなく、慣習的に村民の間で理解・共有される区分となり、村に共有される伝統的認識のひとつである。

2. 沖縄における綱引き習俗

民俗行事として綱引きを行う地域は沖縄に限らず、東アジア、東南アジアの稲作地帯に多く分布が確認されており、これらの地域では「天父地母聖婚説⁴⁾」に基づく「二綱結合型スタイルの綱引き」が共有され「雄綱」と「雌綱」の二本の綱を貫棒(カニキ棒)⁵⁾で結合し引きあう事になる(瀬戸, 国宝 2010: 28-39; 寒川 1998: 128-134)。日本においてこのスタイルの綱引きは九州以南で多く、特に沖縄本島を中心とする南西諸島で多数確認されており、沖縄においてはひとつの伝統文化と言って過言ではないほどである。沖縄県では、往時400か所以上で綱引きが実施されていた。特に本島中南部以南が盛んな地域であり「綱引きを行わない集落はない」とまで言われたほどである(沖縄県教育委員会 2004: 6-7)。一方で、第二次世界大戦を含む時代の趨勢

の中でその多くが姿を消し、現在確認できる事例は百数十か所に留まる（上江洲 2008: 34）。ところで、これらの綱引きは単なるコンペティションではなく地域の生業、特に稲作文化と結びつき実施されており、多くの地域では米の収穫後の稲藁を用いて綱を作成し綱引きが実施されている。沖縄で綱引きが実施される時期は、旧暦6月15日「ウマチー⁶⁾綱」、25日「カシキー⁷⁾綱」、7月15日「盆綱」、8月15日「十五夜綱」の付近に集中しており、この事実からも農耕儀礼的性格が色濃く、豊作への感謝と、また来季の豊作祈願のための儀礼となっている事がわかる（上江洲 2008: 35；寒川 1993: 4-11）。

3. 渡名喜村におけるカシキーの綱引きの歴史と概要

3-1. 渡名喜村のカシキー習俗

渡名喜村のカシキー綱引きは旧暦6月25日のカシキー行事にあわせて行われカリー（嘉例）の節供とし毎年村内二箇所で行われている。旧暦6月25日は、琉球王朝時代にはトネユックイ（骨休め）の日とされ、粟や稲などの農作物の収穫後の休日であった。この日には農作物の豊作を先祖に感謝するため、米やモチキビをおにぎり状にして蒸して作るカシキー（強飯）をトウトウメー（仏壇）にお供えするという習慣があり、この行事全体はカシキーウイミ（強飯節目）と呼ばれている。渡名喜村においてはこの習慣に加えて綱引きが行われ、この綱引きは「収穫祭」の一部を構成する事になっている（瀬戸、国宝 2010: 28-39）。あわせて、渡名喜の場合は綱引きの目的に、村の二大産業であった漁業の繁盛、航海の安全、そして若者のサカイ（栄え）に対する祈願が含まれていたといわれる（渡名喜村役場 1983b: 519-520）。この綱引き行事は、字同士の対決もあって渡名喜の夏の風物詩となり、在島村民はもとより村を離れて生活する人々も「総て」帰ってその日を迎えたと言われる重要な行事となったのである（渡名喜村役場 1983b: 517；沖縄県渡名喜村教育委員会

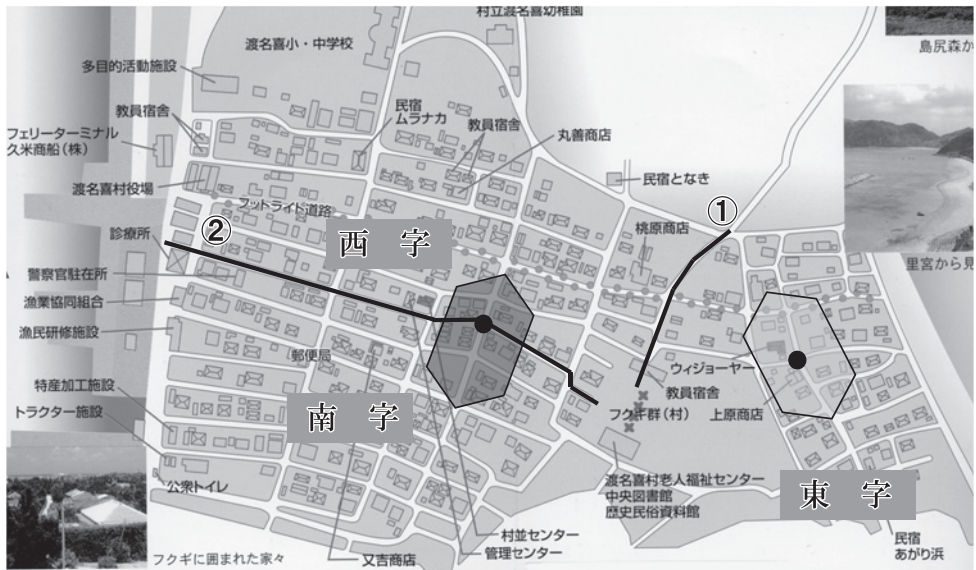
1999: 32）。






ところで、カシキー行事は古くには「年浴」とも称され、田植えに必要な水が豊かにある事を祈った節日でもあり（寒川 2003: 118-119；平敷 1990: 77-78）、渡名喜島の場合にも先述の要素とあわせて、雨乞いを祈願する宗教的文脈にも位置していると思われる（渡名喜村役場 1983b: 518）。たとえば、綱引きに合わせて歌われる「綱引きの歌」の中に、雨を求め、雨に感謝するような、自然の恵みを讃える歌詞が多く存在し、本行事が稲作に限らず、島の「自然の恵みへの感謝」を表す、ある意味「信仰」と通じる行事であることが理解できる（渡名喜村役場 1983b: 517-525）。

3-2. 渡名喜島における綱引き習俗

先述したように、渡名喜村には伝統的に“字”の区分が存在し、村行事は基本的にこの字区分にしたが行われている。たとえば、綱引きの場合は①東字内の対抗（西原内と南原内に分かれる）、②西字と南字の対抗という枠組みにて行われることになる⁸⁾。ところで、同字内で行われる東字の綱引きは「協調」的で「予定調和」的であり、儀礼的性格を強く持つものであると言われるのに対して、西字と南字の綱引きは激しく、お互いの字の名譽をかけた真剣勝負といわれる（図1）。実際、後者の場合、戦前には松明を片手にした各字の者が暗闇の中、相手方の引き手を確認し、自字の関係を発見した場合、綱を引けぬように松明の火を手の甲に当てたという言説さえも残っている⁹⁾。

現在、渡名喜村のカシキー綱引きは行事の約10日前から準備が始まる。事前に役場にて一括して購入した稲藁を各字に分配し字毎に綱が製作される。綱引きで使用される綱の中心部には布製の太いロープが配されており、その周辺に稲藁を編んだ綱を巻きつける形態となっているが、古くは村内で収穫された稲藁と、島の西海岸や入砂島で採取できたクージ（トーズルモドキ）、ガジマルのひげ根などを混ぜて綱を製作していた。しかし、島内で稲作が行われな



-  東字綱引き実施場所
-  西/南字綱引き実施場所
-  東字/西・南字境界
-  西字/南字境界
-  カニキヂチャー

(出典：渡名喜島ガイドブック)

渡名喜島村役場発行

図1 字区分と綱引き実施場所

くなり、またそれら自生する材料を採取する事が難しくなった事により現在の形の綱が用いられるようになった(早稲田大学スポーツ人類学研究室 2008: 103-109)。今述べたように、村が稲藁を一括購入する以前は、村内各字で収穫した米の稲藁を集めて綱を作っていたが、稲藁を集める役目は字の子供達が担っていた。各字12、13歳の子供をリーダーとし下は2、3歳の子供まで一緒に「ワラケーイの歌」と呼ばれる歌を歌い、稲藁を集める。彼らは空き缶を叩きながら歌を合唱し字内を廻ったのである¹⁰⁾。また、子供たちは6月15日頃から綱引き前日までワラビヂナ(子供の綱引き)と呼ばれる子供だけで行われる綱を作り綱引きを実施していた。ワラケーイの際には本綱用の稲藁と、ワラビヂナ用の稲藁を集めて廻っていたとの事である(渡名喜村役場

1983b: 520-521)。

綱引き当日は19時を過ぎる頃二つの綱を結合し綱引きを執り行う「カニキヂチャー¹¹⁾」と呼ばれる西字と南字の境界に位置する辻道に両軍が参集し、雄綱と雌綱はお神酒により清められる。ちょうど20時を迎える頃に両綱はカニキ棒にて結合され、それと同時に堰を切ったように綱引きが開始する事になる¹²⁾。綱引きは約5分で一勝負が決着し、約30分間2回のインターバルを挟んで合計3回戦行われる。インターバル毎に、鐘太鼓のリズムに合わせて両軍が入り乱れてカニキヂチャーにてガーイが展開される。尚、3戦中勝ち数の多い方の字がその年の勝者となる¹³⁾(写真2)。また、すでに行われなくなりましたが、以前は綱引きの後方のチチャーでは高齢女性が円陣をなしてウンダルーと呼ばれる歌と



写真2 西字と南字の綱引き

踊りも行われていた。

3回の勝負が終了し、その年の勝敗が決すると綱からカニキ棒が外され、字毎に実施される直会である「ンバンクイー」に移行する。ンバンクイーでは、各字の成員が太鼓のリズムにあわせ「ンバンクイーの歌」を歌いながら、字内各家庭を廻り、直会用の食べ物・飲み物を集めて廻り宴を催す事になる。渡名喜では昔からンバニや揚げた魚は祝いの食べものとされており、ンバンクイーは、それらを集め分け合う事により、字内における「幸」の収集と再分配がなされる仕組みをなすものようである。この直会も含めて綱引き行事によって各字の成員達は自身の字の構成員としてのアイデンティティを再確認・再生産する事になるのである。

以上、渡名喜島におけるカシキー綱引きの概要を述べてきたが、年々綱引きに参加する人数は、島の人口に比例するように減少し、また年齢比も若者層の流出に伴い高齢化が進み、ワラクイーやウンダルーなどすでに行えなくなった行事もあり、綱引き文化の継承は非常に難しい状況にあるとされている。

4. 綱引き行事と歌の世界

渡名喜島の綱引き行事は、近年上記流れによって展開されるが、行事の当初から常に「歌」が登場している事が確認できる。それらを時系列に並べてみると、稲藁を集めるときの「ワラクイーの歌」、ガーイ（ガーダチ）と呼ばれる綱引きのインターバルで歌われる「綱引きの歌」、「ウンダルーの歌」、そして直会の際に歌われる「ンバンクイーの歌」となる。現在すでに歌われなくなった「ワラクイーの歌」、「ウンダルーの歌」も含めて、渡名喜島の綱引き行事は「歌に包まれた世界」の中に存在するといえよう。以下にそれら歌に関して概要を紹介しておく。

4-1. ワラクイーとワラクイーの歌

ワラクイーとは、直訳すれば「藁を乞う」の意味を表す言葉で、先述したように各字の子供達が字内を廻り、綱作り用の稲藁を集める役割・行事を指す。すでに渡名喜では稲作を行っていないため現在ワラクイーは行われていないが、往時この行事は「子供」の字意識の醸成に重要な役割を果たしていたと考えられる。ワラクイーが行われる際には必ず「ワラクイーの歌」が歌われていた。この歌は「稲藁をもらう時の歌」、「稲藁をもらって帰る時の歌」、そして「稲藁をもらえなかった時の歌」のように行事の流れに沿って歌われる歌詞が異なり、歌を聞けばワラクイーの進行状況がわかるものでもあった。なにより、島内に響く子供達のワラクイーの歌は、村に綱引きシーズンの到来を告げるものであったのである。

4-1-1. 稲藁をもらう時の歌

①ヤーニヤー ユクマサイ アラチタボリ ヤサー
ヤサー

訳：来年は さらに豊作でありますように お願いします

4-1-2. 稲藁をもらい帰る時の歌

①ヤーニーヤー ユクマサイ ウマラチタボリ サ
ーサー

訳：来年は さらに豊作でありますように お願い
します

4-1-3. 稲藁をもらえなかった時の歌

①クマヌヤヤ アクジャクニ クワーティ

訳：この家 (の人は) 悪い根性に喰われて (稲
藁をくれない)

4-2. ガーイの時に歌われる歌 (綱引きの歌)

ガーイはガーエー、ガーダチとも呼ばれ、平敷によれば綱引きのインターバルに行われる両軍の示威行為を指す (平敷 1990: 64-65)。ガーイ自体は、沖縄の綱引きにはよく登場する要素であるが、実施地域によって内容は少々異なると思われる。渡名喜村においては各々字の女性が歌う「綱引きの歌」の歌をバックにして、カニキザチャーにおいて男性女性の別なく両軍が入り乱れて両手を挙げながら踊る。女性はカチャーシーに似た舞い方を、男性は明治期までは両拳を頭上に交差して組み、背中を向かい合わせて踊っていたという。しかし、その後、他の村の影響で相手字を攻撃するような要素が組み込まれ、渡名喜のガーイも示威行為の意味合いを多く孕むことになったと指摘される (渡名喜村役場 1983b: 522-523) (写真3)。



写真3 ガーイ風景

ところで、渡名喜村のカシキー綱引きで歌われる「綱引きの歌」は、古来より各字の女性により口承にて伝承されてきたものである。近年、仲宗根によって採譜されたものだけでも77歌確認できており、実際にはそれ以上があったと思われる (仲宗根 1999: 63-88)。綱引きの歌には旋律はなくチゼン¹⁴⁾と手拍子による単調なリズムに乗って歌われ、その歌詞は、島 (村) の繁栄への感謝とこれからの繁栄を願う、いわゆる予祝の内容となっており、その歌・歌詞は島全体で共有され、ガーイに際しては両軍が交互に、また声を合わせて合唱される事になり綱引きを一つの空間へと醸成していく。また古来の歌ばかりでなく、たとえば出征の歌など、渡名喜島の歩んできた歴史がそこには都度都度詠み込まれており、島の時々の世界観を描き出している (桃原 1998: 55-60)。あわせて、これらの歌は平素は全く歌われず6月に入り綱引きシーズンにのみ歌われるものとなっており興味深い。

平敷も指摘するようにガーイとは示威的空間でもあり (平敷 1990: 64-65)、その場合、そこで歌われる歌にも「示威」的な役割が求められる。そのために、綱引きの歌の中には対戦相手を「挑発」するものも含まれている。また、村史に「……相手を刺激する文句をはさんで戦意をかり立てたり……」とあるように、ガーイでは歌と同様に相手を蔑む「当意即妙」な言葉遊びも重要な要素とされる (渡名喜村役場 1983b: 523-525)。

ところで、歌にしても言葉遊びにしても、ただ相手を攻撃するのではなく、言葉巧みに相手を蔑む「ユーモア」が重要な要素となる。これら「ユーモア」は、一触即発の緊張感を内包する綱引き空間に「笑い」を齎し和ませることにもなる。ちょうどそれは「冗談関係」のようにこの場の空気を高めるために、一時的に日常を壊す事を求められて登場する「必要悪」のようなものとも思える。ウィットに富んだ当意即妙性を付与された「ワタグヂエー (悪口合戦)」は、笑いを誘い逆に両字の関係を近づけることにもなるのである (石井 1994: 365)。つまり、

自字のアイデンティティを強調する事は対立関係だけでなく、結果として「親密性」を強化する事ともいえ非常に興味深いのである。

そして、もうひとつ大切な事として言葉遊びとは「知性」を現すものであり、そこでは「知」の勝負が求められるのである。したがって、ガイとは、島（村）の繁栄を願い、次の綱引き勝負への雰囲気作りであるのと同時に、ユーモアにて一種のガス抜き効果が期待され、また歌の巧みさや言葉遊びなどの「知性」のレベルにおける勝負が行われるなど多層な空間なのである。

綱引きの歌の種類と役割

上記のように、綱引きで歌われる歌は村（島）全体の繁栄を願うものが基本となり、本論文ではそれらを「正統歌」と呼ぶことにする。これらの歌を背景にしながら、ガイ空間は村民全員が「島（村）の幸せ」を願う場所として成立する事になる。また、ガイは示威行為を行う空間でもあるために、お互いを挑発する「ワタグジエ（悪口）」が歌詞に盛り込まれるものもあり、それらを「挑発歌」と呼称する。この挑発にはユーモアが求められ、自身たちの「知力」も試されるのである。また、「ユーモア」でいえば、「勝負」という緊迫した空間を和ませるために用意された歌も存在し、これらを「ユーモア歌」と分類する事にする。したがって、渡名喜村のカシキー綱引きにおける綱引きの歌には、大まかにこれら「三種類の歌」が存在するといえる。以下にそれらのいくつか代表的なものを紹介する。

4-2-1. 正統歌：村全体の幸せを願う歌（例）

正統歌は字の別なく継承される綱引きの歌であり、歌が歌われ始めると字ごとに交互に、また字の別なく皆で唱和されるのである。綱引きが一つの島、村で行われており、綱引きを含むカシキー行事の意味の世界を参加者全員で醸成している事の現れである（写真4）。



写真4 カニキチチャーで歌を歌う女性達

①アミクダキ スブティ アミタボリ シャクトウ アミノ シューシタリ ウーアミ タボチ
 訳：アミクダキ（地名）に登って 雨乞い祈願をしたら 雨を司る神様が 大雨を賜してくださいました

②マガイカラ カキティ アガリスバ マディン シンプリス デバヤ ウィキヤタ メーカイ
 訳：マガイ（渡名喜島近くの海）から アガリスバ（渡名喜島近くの海）まで 千群の鯉は 兄弟たちの前によってくるよ

4-2-2. 挑発歌：対戦相手を挑発する歌（例）

挑発歌は基本的に対戦する字の「ワタグジエ（悪口合戦）」で構成されている。各字に固有の歌詞があるのではなく、同じ歌詞の字名を入れ替えて歌われるようになっている。したがって、同じ歌詞でお互いを蔑む事になり同じ歌が歌詞を替えて交互に歌われる場合も多い。

①ウンダルーモマカチ チナヒキンマカチ ニシジョウ（ヘイジョウ） アングワターヤー トウルバティ タッチ
 訳：（我々は）ウンダルーも負かして 綱引きも負かして 西字（南字）の女の人達は 呆然と立っているね

②ニシジョウ (ヘイジョウ) ニーセーターガー チ
ナヒクスイカリ アガリカラ キョデーターヤ シ
スイデ イモリ

訳：西字 (南字) のお兄さん達は綱引き強いから、
東字のお兄さん達も (喜んで) 綱引きの加勢に行く
よ

③ニシジョウ (ヘイジョウ) チブタタガ タンミカ
チクリバ ニシジョウ (ヘイジョウ) アングワター
ヤー シグリティ タッチ

訳：西字 (南字) の胸の大きな女性達が胸をふりな
がらやってくるよ。西字 (南字) の美しい女性達は
佇まい美しく立っているよ。

④ウンダルーンマカッチ ツナヒキニマカチ (ガー
イニマカチキ) ニシジョウ (ヘイジョウ) アング
ワタヤ トウルバティ タッチ

訳：ウンダルーで負け 綱引きで負け (ガーイに負
けて) 西字 (南字) の女性達は、ほーっとして立っ
ているよ

綱引き勝負に勝った方が歌う歌 (例)

綱引きに勝利した側がガーイに際し、まず歌によ
って自身の字の勝利を宣言し、相手への優越性を示
すことができる。その際には下記の歌を歌いガーイ
が始まるのである。

①チナンカッチャサ ワシタンカッチャサ ユティ
クワ ユティクワ ガアダチアラセー

訳：綱引きも勝ったし 私たち (ガーイにおける
歌) も勝った。(負けた方の人も) 寄ってらっしゃ
い 寄ってらっしゃい

②ニシジョウ (ヘイジョウ) ミヤラビ (ニイセー)
マキティドゥ タッチュミ ユティクワ ユティク
ワ ガーダチ アラサナ

訳：西字 (南字) の女性達 (男性達) は、負けて立
っているのですか? 寄ってらっしゃい 寄ってら

っしゃい ガーダチで戦いましょう

③ツナンカッタン ワシタンカッチャシャ ガーダ
チ アラスサ ユティクワ ユティクワ

訳：綱引きも勝ったし、我々も (歌と踊りで) 勝っ
たし、ガーダチでも 勝負しましょう 寄ってらっ
っしゃい 寄ってらっしゃい

対戦に負けた方が歌う歌 (例)

負けた側も勝利側の売り言葉に呼応して以下の歌
を唱和し、ガーイに参加する。

①チナスドゥマキタル ワシタヤマキラン ユティ
クワ ユティクワ ガーダチ アラシ

訳：綱引きで負けてしまったが 我々は (歌や踊り
で) 負けてないよ 寄ってらっしゃい 寄ってらっ
っしゃい ガーダチで 勝負しましょう。

4-2-3. ユーモアの歌：空間を和ませる歌 (例)

勝負に関係なく綱引きという空間を和ませ、また
一つにするためにユーモアに富んだ歌が歌われる。
これらの歌は、相手を蔑むものではなくその場を中
和し、ただただ場の空気を整える効果も持っている。

①ソーミンノダシ カチューダシ ササギテヌシャ
ギテ タグイクミクミ

訳：ソーメンの出汁はカツオダシ (箸で) はさん
で食べながら いっぱい食べましょう

②ヘーシサンシヤ スバニナリ コーシカキカヤ
サミカキ

訳：(綱引きの場において) 囃子をしないものは
自分のグループから離れなさい そして、自分の身
体 (の痒い所) でも掻いてなさい

4-3. ンバニクワイとその歌

「ンバニ」は当該地域の言葉にて「おにぎり」、「ク
ワイ」は「乞う」の意味を持ち、「ンバニクワイ」と

は直訳すると「おにぎりを乞う」という意味であるが、ここでは綱引き後に各字で行われる直会を指す。ンバニクイーでは、ンバニクイーヤー（おむすびを乞う人）が各字の人々が「ンバニクイーの歌」を唱和しながら字内の各家庭を廻り、直会用の食べ物や飲み物を集めて宴を催す事になる（渡名喜村役場 1983b: 524-525）。ンバニクイーの歌は大きく分けて「ンバニをもらいに行く時」、「ンバニをもらって帰る時」、そして「ンバニをもらえずに帰る時」の3つのパートで構成されており、前出の「ワラクイーの歌」と同様の構成である。渡名喜では昔からンバニや揚げた魚は祝いの食べものとされており、それらを集め、また分け合う事は「幸」を字の各家庭から集め、それを再分配されることに他ならない。そもそもはリヤカーを引いて字内を隈なく巡っていたが、現在では軽トラックにて巡回がなされている。また、昨今はこの歌を歌えない人も多くなり、歌を吹き込んだCDを携行しながら字内を廻る姿も見られるようになった。

4-3-1. ンバニクイー 家に入る時の歌（例）

①クマヌ ウミヤシキ タダナランヤシキ ウチミグイミグイ タマヌヤシキ

訳：この家は とてもいい屋敷だね。（村内を）廻ってきても 素晴らしい屋敷

②クマヌ ウミシュネヤ タフーナヒトサラミ マルキジクシャティ ウマガヤメーダチ

こちらの おじいさんは とても幸せな人だね お金もいっぱいあって 孫も抱っこしててね

③ユッキー フシャネー ランド ンバニ フシャネー ランド ムカシ ウヤファーフジヌ ユジリ デーモヌ

訳：夕飯はほしくない おにぎりをほしくない 昔からの祖先からの言い伝えだから やっているのだよ

4-3-2. ンバニをもらって帰る時の歌（例）

①ヤーニヤー ユクマサイ アラチタポリ イヤサーサー

訳：来年は さらに豊作でありますように お願いします

4-3-3. ンバニをもらえなかった時の歌

①クマヌ ウミハハメーヤ アクジャクヌウマリ ユーヤーキティチュシガ ンバニヤ クーラン

訳：この家の おばあさんは 根性が悪いですね 夜が明けてくるというのに ンバニをくれないで

4-4. ウンダルーとその歌

綱引きに際し、各字の高齢女性達が綱引き後方チチャーにて円をつくり「ウンダルー」と呼ばれる舞踊を踊っていた。ウンダルーに似た言葉は沖縄のどこの地域にも見つからないとされ、その語義、語源に関してはよくわかっていない。ウンダルーは踊る空間によって幾人でも踊る事ができ、参加者は交代し乍ら踊っていたと言われる。基本的には、ウンダルーは手拍子でリズムを取りチジンを打ち鳴らしながら舞われ、緩やかな動作、素朴な手振りの舞いであり拝み手、押し手、払い手、捧げ手、こねり手やお尻を両手で叩くといった「単純」な動作の繰り返しとなる（渡名喜村役場 1983b: 516-517）。三味線や太鼓を伴わない素朴な舞踊のスタイルは、琉球の古歌謡に通じるとも言われ、渡名喜村ではウンダルーは奄美大島より伝来した古い文化とも云われている。一方で、沖縄本島に伝わるウスデークやシヌグモーイとの類似性も指摘されており興味深いところである。ウスデークやシヌグモーイは天変地異や病氣、外敵などを「払い除ける」役割を果たすと考えられており、またそれらは五穀の豊饒を祈る予祝行事の性格も内包していたために綱引き行事の中での役割については興味深いところである。尚、先述したように、ウンダルーは字の高齢女性により担われていたが現在ではもう行われていない（渡名喜村役

場 1983b: 516-517)。

ウンダルーの歌 (例)

①ボウジャーアンマー ヤラワン トウンジティモ
ウリ アシバ ヒトウヌトウジ ヤラワ クチャ
ニ クマリ

訳：赤ちゃんお持ちのお母さんであっても 飛び出
ておいで共にあそばうじゃないか 夫のある妻であ
るなら 裏の小部屋に籠りなさい

②ハナヌ サンカイグワヤ ヤマトウタビ モラ
チ トウジヌ ウミアヤヤ ウマチ カンディ

訳：花盛りのサンカイグワは 大和旅に行かせて
妻のアヤは (夫を) 待ちわびている

5. 綱引き行事で再確認される字の記憶

綱引きに際して歌われる歌は各字で各々習得され
るものであった。六月に入ると、毎夜各字のチチャ
ーに女性達が集まり、時には夜明けまで綱引きの歌
を歌っていたようである。先述したように、綱引き
の歌は6月に限定されて実践されるものであり、こ
の時期にのみ村内に現れる「島の記憶」なのである。

たとえば、南字でも6月に入ると毎夜歌練習が営
まれていたという。南字ではムラガー (共同井戸)
付近に高齢者を中心として女性が集まり、ハガマの
蓋で拍子を取りながら歌を唱和していたそうである。
ところで、綱引き当日が近づくにつれて字間の緊張
感は高まっていく。もしも、歌の練習を行っている
時に対戦相手である西字の女性が付近に現れると彼
女達は歌うのをやめてその場を立ち去ったという。
この時期はすでに対決モードに突入しており、言い
換えれば、この時点から綱引きの勝負はすでに始ま
っていたともいえよう。ちなみに、歌の「練習」と形
容されるが、字の先輩達から系統だった指導が行わ
れる機会ではなかったようである。ちょうどレイヴ
等が指摘する「正統的周辺参加」のように、若い参
加者達は字の先輩の歌を聞き、歌のリズムや歌詞を

覚えていったのである (レイヴ, ウェンカー 1993:
71-106)。現存する80に及ぶ歌はこのようにして、
各字の中で一年の一時期に集中して継承されてきた
のである。また、そこは同時に個人として存在する
のではなく、字という集団の構成員として「過去の
記憶と向かい合う空間」だったのである (アルヴァ
ックス 1989: 163-184)。

ところが、第二次大戦や生業形態の変容による島
民の減少など、行事を取り巻く環境は著しく変化し、
現在全ての字で歌練習は行われなくなってしまった。
南字でも昭和40年代頃までには「歌練習」は行われ
なくなってしまう。そのために、それまで綱
引き行事に際して、再生産されてきた歌文化の継承
が途切れてしまう事になり、綱引きを支えていた世
界観が見失われ、文化的綱引きの意味合いは希薄に
なり、字のそして島の記憶の継承の場と集合的記憶
は途絶えてしまう方向に向かったのである。

6. 綱引き行事と綱引きに見る勝負の多層性

民俗綱引きも、基本的には単純なルールに基づく
コンペティションであり、自陣に相手側を引き入れ
た時点で勝負が決する一つの競争である。しかしな
がら、民俗綱引きでは、これまで述べてきたように
歌や踊り、そしてそれを支える「知の体系」などそ
の他の構成要素が、綱引き自体の意味を決定する上
で重要な役割を果たしているのである。つまり、本
綱引きは綱引きの勝負が、全て結果を体現するよう
な単純構造に収まるものではない。渡名喜村のカシ
キー綱引きはこれまで述べてきたように①ワラクー
イ、②ワラビザナ、③綱引き、④ガーイにおける踊
り、⑤ガーイにおける歌謡、⑥ウンダルーにおける
踊り、⑦ウンダルーにおける歌謡、⑧ンバンクーイ
という行事が時系列に進みながら、重層的に構成さ
れていく、いわば行事の複合体なのである。

たとえば、綱引きの歌の中にも「…ウンダルーで
負け 綱引きで負け ガーイに負けて…」というもの
があるが、実践者の認識レベルにおいてもひとつひ

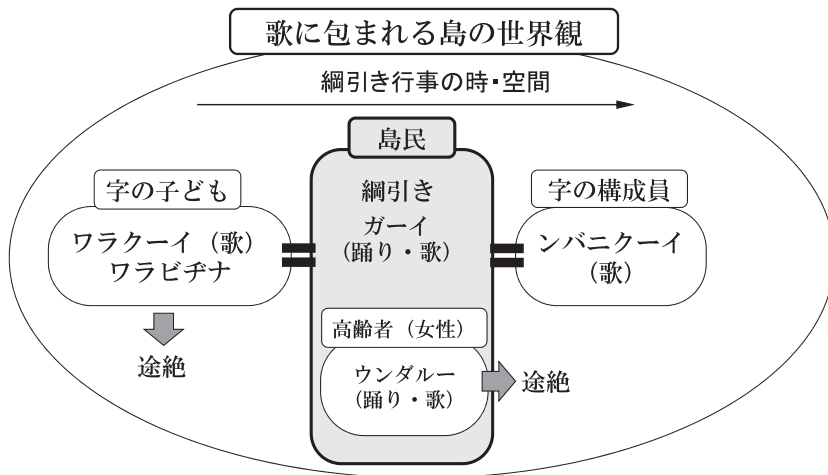


図2 網引きの多層概念図

とつの行事は独立した勝負事のレベルにあり、これらの総体としてカシキーの網引き行事は存在しているのである。

もちろん、「網引きの勝負」が、それら全体のクライマックスに位置し、「象徴的」にも全ての結果を受け止めているのも事実であろう。つまり、網引きに勝ったらその年は勝ちなのである。しかしながら、網引きの勝負以外の構成要素も同様に重要な意味を持つ。わかりやすく述べるならば③を支える構成要素として①②④⑤⑥⑦⑧が独立し共存しているとも言えるのである。

また、前述したように、網引き行事に纏わるものその全てが歌とともに存在しているとも言え、逆に言えば「歌の世界の中に網引きが存在している」とも指摘できよう。網引きの歌に登場する歌詞は基本的に豊年、豊漁への感謝や来年への願いなど、島に齎され全ての字に共有される「幸」への感謝と願いがその中心的であり、これらはこの行事において達成されるべき最も重要な価値とも言えよう。こう考えると、歌で表現される世界観は、実はこの行事において周辺的ではなく、むしろ中心的な位置に存在するものといえるのである。

このように網引き行事に内包され、その中心的価値を継承し続けてきた歌の世界は当該コミュニティ

の価値の再生産に大きな役割を果たしてきた。しかし、渡名喜村のように高齢化の進む集落では地域で継承してきた無形文化財たる集合的記憶を継承する事は困難になってきている。「伝統的知」ともいべき地域の記憶は、それを包み込む環境の変化の影響を大きく受けるのである。チチャーにおける歌練習の文化が廃れてしまった今、網引き行事の重要な構成要素である「歌の記憶」の継承が途絶えてしまい、それはすなわち島の記憶が失われる危機をも意味しているのである。

7. 高齢社会と離島の福祉サービス

我が国は超高齢社会を迎えるのと同時に人口の著しい減少を経験している。結果として人口は都市部に集中を見せ続け、その結果、周辺域では加速度的に人口の減少、過疎化が進んでおり渡名喜村もその例外ではない。現在この島は沖縄県で最も人口の少ない村、高齢化率の最も進んだ行政区となった。ところで高齢社会を迎えさまざまな福祉事業が国から展開されているが、そのひとつに通所の福祉事業である「デイサービス¹⁵⁾」事業があることはご存知の通りである。近年、渡名喜村においても「デイサービス」事業が導入・開始されることになったが、

実はこの通所による福祉サービスが当該地域の文化保護とその継承に大きな影響を持つことになったのである。

渡名喜村におけるデイサービス事業は、現在、渡名喜村社会福祉協議会（後出：渡名喜村社協）が展開する事業である。渡名喜村社協は1993年4月に社会福祉法人化され、翌年4月から独居老人に対し「地域入浴サービス」を、さらに同年に「在宅福祉サービス」の一環として月1回2時間の「ミニデイサービス」事業を開始し、これらにより渡名喜村における「通所」高齢者福祉政策がスタートしたといえる¹⁶⁾。その後、2000年4月には「介護保険事業」による訪問と通所の福祉事業がスタートし、週1回（水曜日、月4回、10-16時まで6時間）の通所サービスが開始される事になった¹⁷⁾。同事業では老人福祉センター内に厨房施設を設置し、これによって「昼食付きデイサービス」が実施できるようになったのである。また、同年からは介護ヘルパーの雇用も叶い、現在に至るまでヘルパー4名体制でデイサービス事業を展開している¹⁸⁾。このようにさまざまな条件が整い、結果として渡名喜村のデイサービスへの参加人数は常時30名程度になった。その後2006年に誕生した新村長の下、さらに高齢者福祉事業は拡充していく事になる¹⁹⁾。2009年からは通所サービスが週3回（月曜日、水曜日、金曜日）実施されるようになり、これによって、高齢者達へのサービスが拡充し、参加者達同士も顔を合わせる機会が増加することになったのである²⁰⁾。

8. 字を超えた記憶の確認場所 デイサービスという現代空間

ところで、そもそも、デイサービスとは利用者が可能な限り自立した日常生活を送ることができるよう、利用者の孤立感の解消や心身機能の維持、家族の介護の負担軽減などを目的とするものであり、利用者が通所介護の施設に通い、食事や入浴などの日常生活上の支援や、生活機能向上のための機能訓練



写真5 デイサービス健康指導風景

などを日帰りで提供するものを指す。また、生活機能向上グループ活動など高齢者同士の交流機会も積極的に提供するものである（厚生労働省 HP）。

このように、デイサービスでは、参加者の「健康の維持増進」、「生活機能の向上」、そして「社会的交流の場の提供」が重視されるのである。渡名喜村では、この点を充足させるために平素のサービスと合わせて、たとえば、島外から理学療法士や管理栄養士を定期的に招聘し参加者の健康維持や生活機能の向上を積極的に図っている（写真5）²¹⁾。

ところで、全国のデイサービスでは「社会的交流の場の提供」のために、地域や参加者のニーズに合わせて四季折々にレクリエーション行事が提供されているが、渡名喜村もその例外ではない。たとえば、渡名喜村では、村行事に合わせた独自のレクリエーションが実施されており、高齢者達の村民としてのアイデンティティを刺激している。たとえば5月ならば海神祭のハーリー競争に擬えて、高齢者女性による「女バーリー」なるレクリエーションが実施されている。これは屋内で櫓を模した棒を用いながら櫓を漕ぐ仕草をするだけのものであるが、彼女達は、そもそもハーリー競争に熱狂していた人々であり、また、字対抗で行われることもありこの「形だけ」の“競争”は彼女達のイメージーションと共に大いに盛り上がるのである²²⁾。また、7月の渡名喜幼小中学校水上運動会²³⁾の時期には、海の行事にち



写真6 綱引きの歌の練習風景

なんでハマアシビのひとつである「クガグアウスエー」などを室内で行う。クガグアウとは「小さな卵」、ウスエーは「鶏が卵を抱いている」事を指し、親鶏から卵を奪う遊びである。実際に浜で行われる場合は、卵の代わりに貝殻を3-4個用意して親鶏になる人、卵を盗む役に分かれる。親鶏になった人は四つん這いになり卵を腹の下に置きこれを守り、他の人は親鶏の間を縫って卵を奪うのである（渡名喜村役場 1983b: 651-652）。これは、参加者達が小さい頃によく行った遊びの一つであり、このようなアシビは彼女達を童心に帰らせ、夢中にさせるといふ。また、10月の渡名喜幼小中学校運動会の時期には、玉入れなど陸上の運動会で行われる現代的な競技を模したレクリエーションも実施している。

これらの一環で、1995年から6月には「綱引きの歌」の練習会が行われるようになった（写真6）。この練習会はあるヘルパーの発案によるものである。渡名喜村社協では練習会用に歌詞カードを作成し、歌い方や歌詞の確認しながら歌の練習を実施している²⁴⁾。ところで、綱引きの歌の練習は前述したように、そもそも各字内で継承されてきたものであり、対抗字への「対抗意識」を内包・高揚させながら実践されるものであった。一方で、デイサービスという空間は、各字の人間が混じり合った現代的空間であり、そこは字という旧来の区分が存在しない場所ともいえる。そのために、綱引きの区分でいえば、

まさに「呉越同舟」の空間となる。デイサービスでは字の出自に関係なく参加者はランダムに着座するために、当初はそのような空間で歌を歌う事自体にネガティブな反応が多かったという事であった。

9. 文化装置としてのデイサービス

先程も述べたように、高齢者達はデイサービスでの歌練習に当初抵抗感を示していた。なぜならば、「綱引きの歌」自体が、字という空間やアイデンティティに大きく依拠するものであり、他の字と共有されるべきものではないからである。しかしながら、各字のチチャーにおける歌の継承が途絶えた今、また、参加者達の年齢が高くなり、個人レベルでの記憶の保持が限界を迎えたこの時期に提案されたデイサービスでの練習会は、徐々に説得力を持って高齢者達の心を動かす事になった。あるヘルパーは「渡名喜村には青年会や婦人会がないので、文化の後継集団や空間が存在していない。もしそれを継承・実践するとしたら、デイサービスぐらいですね。」という。続けて「すでに若い人達はカシキーの歌がわからなくなってしまっている。このような枠組みを創らないと村の伝統文化が途絶えてしまう。」という。渡名喜村社協局長も「デイサービスの中で歌を取り上げなかったら、歌の継承は厳しかったでしょうね。今は村の中で、唯一デイの時に歌の継承が行われています。」という。レクリエーションという枠組み乍ら、彼らの強い後押しによりデイサービスという現代空間に伝統歌の練習空間が創出され、それは島の記憶を次世代に継承する貴重な空間となったのである。いや、むしろレクリエーションというアシビの空間だったからこそ、参加者達の「こだわり」をすり抜けて練習会が実施できたのかもしれないとも思われ興味深いところでもある。

ところで、チチャーに代わる空間として機能する事になったデイサービスであったが、実はチチャーにはない新たな機能を獲得するようになった。それは、この練習空間を、若年層が「主体的」に高齢者

の記憶を掘り起こす場として利用した点である。そもそも、デイサービスでは高齢者の健康の維持・増進をヘルパー等が主導して実践する場であり、この場におけるイニシアチブはヘルパー（若年層）側にある。そのために、字や村の伝統文化である「歌の練習」に関しても、同様の力学によって進められることになり、高齢者の記憶は、ヘルパーによって系統だって抽出されることになったのである。結果として、この歌練習は単なる行事準備としての練習会の域を超えるものとも指摘できよう。つまり、デイサービスにおける練習会では、若年者層にあたるヘルパーが主体的に関与し、高齢者自身が記憶の整理と確認を行い集合的記憶として島（村）の記憶を得る事ができる「字」という枠組みを超えた空間となったのである。

たとえば、各字で継承される歌は基本的に同じ歌であるが、長い時間を経る中各字で少々異なる継承のされ方がなされ、いわゆる「亜種」が生まれ定着する事にもなった。そのように、これまでの各字のチチャー練習では気づかなかったような「差異」をデイサービス練習会では発見、確認、共有する機会を得る事になったのである。それは字の異なる人々が、字という枠組みを超えて渡名喜島という島の記憶を共有するプロセスに身を置く事を意味しているのである。デイサービスという公的枠組みは、伝統文化である歌という「島の記憶」を再生産する文化装置として機能し、また、文化的中心空間として存在するようになったのである。デイサービスは、島（村）全体を一つの字として同じチチャーに集わせるいわば“デイサービスチチャー”という新しい空間を誕生させたのである。

まとめ 現代空間が護る島の記憶 字から村全体へ拡がる記憶の共有

沖縄県島尻郡渡名喜村カシキー綱引き行事に焦点を当て、綱引き行事を通して確認・再生産される字・村・島の集合的記憶の醸成過程を、綱引きとい

うコンペティションだけでなく、それに付随して生起する「歌の世界」に注目し検討してきた。その結果、渡名喜村の綱引き行事は①ワラクーイ、②ワラビヂナ、③綱引き、④ガーイにおける踊り、⑤ガーイにおける歌謡、⑥ウンダルーにおける踊り、⑦ウンダルーにおける歌謡、⑧ンバニクイという、ひとつひとつの勝負事の総体として存在し、各行事には常に歌というローカルナレッジが共存し大きな意味を持っていることが確認され、綱引き行事が歌を共通の基盤とする「多層な文化複合体」であることが確認された。特に「綱引きの歌」に登場する世界観は島（村）に共有される記憶の集積であり、ガーイ自体が島（村）の記憶の確認・再生産の場として機能してきた事も確認できた。ところで、それら世界観を継承してきた各字チチャーで歌練習が潰えた事は、島（村）にとって重大な意味を持つことになった。すなわち、それは記憶を継承する場を失う事を意味し、島に受け継がれてきた文化を消失する危機に陥ったといえたからである。ところで、そのような折、高齢社会を迎えた日本社会で誕生した「デイサービス」という福祉空間が本村にも誕生し結果としてこの危機を救う事になった点は興味深い。「レクリエーション」の枠組として始まったデイサービスの歌の練習会ではあったが、チチャーでの練習会のなくなった村にとっては唯一の歌の継承空間となり、デイサービスは伝統文化の保護装置（空間）として機能することになったのである。

また、興味深い点として、このデイサービスにおける練習空間はチチャーとは異なり「全ての字」の高齢者が集う空間である事が挙げられる。そのために、これまでは各々字によって継承されてきた「歌の記憶」が他の字の成員と共に確認され、新たに共有される事になったのである。つまり、デイサービスという空間は、島（村）にとって字という枠組みを超えたひとつの「集合的記憶の確認、継承の空間」となり、字という枠組みを超えた新しい「チチャー」の機能を獲得し、いわば“デイサービスチチャー”とも呼称できる空間になったのである。

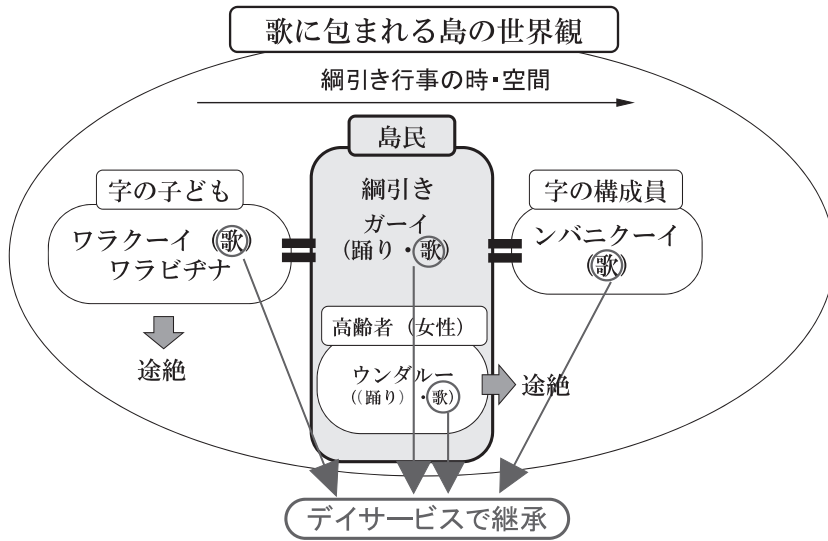


図3 網引きの多層概念図（デイサービス含）

一方で、網引き当日が近づくと、“デイサービスチチャー”においても、字毎に分かれた歌練習が行われることになる。そうなると、そこはさながら網引き当日の「カニキチチャー」と化し、特に南と西字の間では、お互いがお互いを意識し「挑発」しながら歌を歌い合うのである。したがって、この新しいチチャーは、これまで同様に各字のアイデンティティ強化の場としても機能し、また「カニキチチャー」的要素も包含しているといえるのである。つまり、“デイサービスチチャー”は字の垣根を超えた歌の継承空間として機能すると同時に、各字のアイデンティティ強化の場、また、字間の競争空間としても存在している事になるのである。そのために、デイサービスチチャーは、ある意味で一連のカシキー網引き行事の流れに組み込まれる存在ともいえよう。先述した関係でいえば、9番目に⑨「デイサービスチチャー」として位置付き、網引き行事の中に位置し島（村）の記憶を確認・再生産する場となったのである（図3）。

デイサービスにおける練習会の登場は存亡の危機にあった歌の継承機会を引き継ぐことになったのと同時に、カシキー網引きという空間を拡大させて、

伝統が現代に内包されながらその文化的独自性も護る機会を提供したのである。このデイサービスという新たな“現代的チチャー”は歌の記憶を継承し、島（村）全体に受け継がれてきた記憶を受け継ぐ空間となりつつあるのである。

謝辞

本論考の作成には比嘉シゲ子氏（東字）、比嘉春子氏（南字）、比嘉ミツ子氏（東字）、桃原恵美子氏（西字）、桃原ツル子氏（南字）はじめ渡名喜村デイサービスに参加されている皆様、桃原又一氏（渡名喜村老人クラブ会長）、桃原優氏（渡名喜村村長）、比嘉敏久氏（渡名喜村社会福祉協議会事務局長）、上原雅志氏（渡名喜村教育長）、上原昇氏（前渡名喜村村長）、渡口侑真氏（元渡名喜村教育長）、比嘉茂義氏（元渡名喜村教育長）、南風原豊氏（福木島となき代表）、比嘉進氏（元渡名喜村役場経済課長）、又吉守氏（渡名喜村村議会事務局長）、比嘉秀正氏（渡名喜村役場経済課長）、比嘉正樹氏（渡名喜村村議会議長）、上原学氏（元渡名喜村役場経済課長）、上原行雄氏（渡名喜村漁協）、仲里美智子氏（渡名喜村住人）、社協ヘルパーの比嘉幸枝氏、比嘉玲子氏、南風原るみ子氏、比嘉千賀子氏、比嘉洸徳氏（渡名喜村社会福祉協議会）、はじめ渡名

喜村の皆様にご多大なるご協力をいただきました。この場を借りて心より御礼申し上げます。また、この度立命館大学産業社会学部を退官されました遠藤保子先生には、筆者が大学院生の頃よりさまざまご指導いただきました。本論考は義理堅く、「粹」で誰からも愛される遠藤先生に出会い、指導を乞う事ができた偶然に感謝し、精一杯執筆いたしました。この場を借りて遠藤先生に御礼申し上げます。ありがとうございます。

注

- 1) 終戦直後の時期には復員者や家族引揚者などによって、一時期2100名を超える人口であったという(沖縄県渡名喜村教育委員会 1999: 23)。
- 2) 2018年5月31日現在(渡名喜村役場 HPによる)
- 3) 2018年6月8日現在(沖縄タイムズ Webによる)
- 4) 古代メソポタミアの神話に因る観念。一年に一回天父は地母と交わりこれを孕ませ、大地は身ごもりその年の実りが保証されることになると云われる(寒川 1998: 129)。
- 5) 実施場所により呼び名が異なり沖縄県内でも「カニチ棒」, 「カヌチ棒」などさまざまであるが、本論文では『渡名喜村史』の表記に倣い「カニキ」とする(沖縄県教育委員会 2004: 19-20)。
- 6) 旧暦2月, 3月, 5月, 6月15日を前後に行われる。2月のウマチーは麦の穂祭り, 3月のウマチーは麦の収穫祭, 5月のウマチーは稲や粟の穂祭り, 6月のウマチー稲や粟の収穫祭となる。
- 7) 旧暦6月25日の行事で新穀の豊穰を歓喜する刈上げ祝, 豊年祝, 豊作の感謝, 来年の豊作祈願とともに若者の栄えを祈願する(渡名喜村役場 1983b: 517-518)。
- 8) そもそも東字の綱引きは西字と南字の綱引きよりも少々早く行われていたが、現在では同時刻に行われるようになった。
- 9) 瀬戸フィールドノートによる。
- 10) 子供もワラビジナ(子供の綱引き)を実施されており、カシキーの綱引き当日までは子供が表舞台で活躍していたとも言える。ちなみにワラビジナは大人用綱引きの藁を集める4-5日前から綱引きチチャーで行われカヌチ棒も使われていたと言われる(渡名喜村役場 1983b: 520-521)。
- 11) チチャーとは「辻道」の事を指す言葉で、綱引きに際しては一つの重要な空間、境界として機能し、綱引き勝負や歌、踊りが実践される場所となっている。
- 12) 綱引きは「ホーイヤ」もしくは「ホーイヤサ」という掛け声とともに行われる。この掛け声に登場する「ホー」という言葉は方言で女性器を指す。性器を象徴的に登場させるこの掛け声には、アジアに共有される天父地母聖婚説に基づく象徴的性的結合が意味されているとも考えられ、非常に興味深いといえる(寒川 1993: 4-11)
- 13) 綱引きには老若男女問わず誰でも参加できるが、過去一年間に家族が亡くなった家の者はカシキー祭自体に参加する事ができないとされる。
- 14) 沖縄・奄美地方の鼓の一種である。鼓面は直径30cm程である。
- 15) ここでは介護保険法に基づくデイサービスを指し「要支援, 要介護」の方に対するサービスを基本としているが、介護予防のための通所による高齢者福祉サービス参加者も含めて、当該事業者、参加者達の認識や共有される地域の一般的呼称として「デイサービス」としている。
- 16) 当初は渡名喜村社協事務局長, 渡名喜村老人会のボランティアにより運営されるものであった。当時の事業内容は参加者に軽食を提供し、共有できる空間を提供するという小規模な事業であった。
- 17) 渡名喜村役場からの委託事業として「介護予防生活支援事業」, 「生甲斐対応型デイサービス事業」が始まり、これらもあわせて実施されている。
- 18) 渡名喜村社協の取り組みには「通所」型事業だけではなく、昼飯を高齢者の自宅に配食するような「訪問」型事業も存在する。
- 19) 上原昇前渡名喜村村長は、在職中に老人福祉政策を積極的に推進した。
- 20) 「配食サロン」とは介護予防対策のひとつであり、渡名喜村の「国民健康保険事業関わるミニデイサービス事業(国保)」を基盤として2005年に開始された「要支援」以外の高齢者のための福祉事業である。
- 21) 週3日実施される「デイサービス」は基本的に同じメニューで実施されるが、実際には「配食サ

- ロン」と「デイスサービス」というように予算枠が異なる二つの事業を同様のサービスのよう展開している。
- 22) 海神祭は渡名喜村の三大大行事のひとつ。漁業を生業としたこの島では重要な意味を持っている。祭りの実施日を重要視しており海神祭が執り行われる5月4日以前にはデイスサービスにおける女バーラーも行われない。
- 23) 渡名喜村の三大大行事のひとつであり2018年に100周年を迎える。幼小中学生が東の浜の砂浜、海中に設けられた競技会場で競い合い、村民はそれを応援する。
- 24) 渡名喜村社協の事務局長比嘉敏久氏のお母様比嘉ヨシ子氏によって作成されたものである。

引用・参考文献

- 石井真夫「冗談関係」石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良他 1994『文化人類学事典』弘文堂 p.365
- 石川栄吉、梅棹忠夫、大林太良他 1994『文化人類学事典』弘文堂
- 上江洲均 2008『沖縄の祭りと年中行事—沖縄民俗誌Ⅲ—』榕樹書林
- 大林太良、岸野雄三、寒川恒夫他 1998『民族遊戯大事典』大修館書店
- 沖縄県教育委員会 1996『沖縄の文化財Ⅳ 無形・民俗文化財編』沖縄県立博物館友の会
- 沖縄県渡名喜村教育委員会 1999『渡名喜島むら並み保存推進調査報告書』
- 坂本磐雄 1989『沖縄の集落景観』九州大学出版会 pp.191-358
- 瀬戸邦弘 フィールドノート
- 瀬戸邦弘、国宝真美 2010「現代的イベントと共生する伝統文化—渡名喜島のカシキー綱引きに関する一考察—」『生活学論叢』Vol.17 pp.28-39
- 寒川恒夫 1993「東アジアの綱引」『季刊 自然と文化特集 東アジアの綱引』日本ナショナルトラスト

- pp.4-11
- 寒川恒夫「綱引き」1998『民族遊戯大事典』大修館書店 pp.128-134
- 桃原善一 1998『美ら海（渡名喜島考）』美来印刷
- 渡名喜村役場 1983a『渡名喜村史』上巻
- 渡名喜村役場 1983b『渡名喜村史』下巻
- 仲宗根幸市 1999『琉球列島 島うた紀行 第三集 沖縄本島周辺離島 那覇・南部』琉球新報カルチャーセンター pp.63-88
- 平敷令治 1990『沖縄の祭祀と信仰』第一書房 pp.1-115
- 法政大学沖縄文化研究所 1991『沖縄渡名喜島における言語・文化の総合的研究』
- 武者英二、永瀬克己 1991「渡名喜島の空間構成について」『沖縄渡名喜島における言語・文化の総合的研究』法政大学沖縄文化研究所 pp.57-196
- 早稲田大学スポーツ人類学研究室 2008「渡名喜島におけるカシキーの綱引きに関する一考察」『スポーツ人類学研究』第9号 pp.103-109
- ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンカー著 佐伯胖訳 1993『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書
- M. アルヴァックス著、小関藤一郎訳 1989『集会的記憶』行路社

参考 HP

- 厚生労働省 HP
<http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/publish/group7.html> (2018年5月9日)
- 渡名喜村役場 HP
<http://www.vill.tonaki.okinawa.jp/index.jsp>

参考 Web

- 沖縄タイムズ Web
<http://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/61175> (2018年6月8日)

Day Service as a Place of Intersection Called “Chi-Cha,”
and the Memory of Islands :
Traditional of Tug-of-War Events Protected by Modern Society

SETO Kunihiro ⁱ

Abstract : In Tonaki village, Okinawa Prefecture, a traditional tug-of-war is held every year together with the Kashiki event. Tug-of-wars were formerly held in Okinawa prefecture in many places as annual events expressing gratitude for the harvest and to ancestors at the time of Kashiki. In this thesis, we focus on tug-of-war events on remote islands, and consider the process of fostering collective memories of letters, villages, and islands that were confirmed and reproduced through events, looking not only at the competitive tug-of-wars, but also the “dancing and singing world” that accompanied them. In this paper, we visualize the tug-of-war as a multilayered cultural complex, and consider this event to be a way of confirming memory of the island (village), and acting as a fostering device.

In particular, in this thesis, under circumstances where the fostering function has been lost in this village, where depopulation is advanced and aging has become remarkable in recent years, we are trying to assess the dynamics of traditional culture focusing on the fact that it has been taken over by the appearance of the welfare space called “day service” and this contemporary space is now functioning as protection device (space) for traditional culture.

Keywords : remote island, welfare work, day service, traditional culture, collective memory

i Associate Professor, Organization for Educational Support and International Affairs, Tottori University